

緩和ケア病棟における死別ケアにみる終末期がん患者の家族ケアの構造

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-01-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 謝花, 小百合 メールアドレス: 所属:
URL	https://opcnr.repo.nii.ac.jp/records/387

氏名	謝花 小百合
学位の種類	博士(看護学)
学位記番号	沖看大博第9号
学位授与年月日	平成23年9月21日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	緩和ケア病棟における死別ケアにみる終末期がん患者の家族ケアの構造
論文審査委員	主査 教授 神里 みどり 副査 教授 嘉手苺 英子 副査 教授 池田 明子 副査 教授 大湾 明美 副査 教授 前田 和子

論文内容の要旨

1. 目的

患者の臨終前後の家族ケアは、遺族のグリーフ(悲嘆)に繋がる重要なケアであることが示唆されている。しかし、終末期がん患者の家族ケアは看取りまでの研究が殆どであり、死別直後から死亡退院に至るまでの家族ケアに関する知見は得られていない。そこで、本研究では、緩和ケア病棟における終末期がん患者の危篤前から死亡退院に至るまでの家族ケアの構造を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

沖縄県内の2施設の緩和ケア病棟に勤務する看護師を対象に、終末期がん患者の危篤前から死亡退院に至るまでの家族ケアに焦点をあて、長期フィールドワークによる参与観察を行った。その後、家族ケアに対する看護師の認識を理解するために面接を実施した。得られたデータを逐語録におこし家族ケアの場面を経時的に質的帰納的に分析した。期間は平成22年2月から9月までの7ヵ月間であった。

3. 結果

研究参加者は看護師19名、終末期がん患者19名とその家族49名および他職種4名であった。

ターミナルステージの時期と終末期がん患者の家族ケアの内容から家族ケアの構造が明らかになった。

1)ターミナルステージの時期

ターミナルステージの時期として、**看取り時期**と**死別時期**の2つの時期が明らかになった。**看取り時期**は、「危篤前」「危篤」「臨終」の3つの時期であった。**死別時期**は、「命終」

「死後のケア」「他職種と家族との別れの会」の3つの時期であった。さらに「命終」は、3つの時期：「呼吸停止」、「家族のための死亡宣告」、「家族のための死の分かち合い」に分類され、「死後のケア」は、「家族と協働で行うシャワー浴」、「家族が選択するその人らしさの装い」、「家族が主体的に行う死化粧」の3つの時期に分類された。

2) 終末期がん患者の家族ケアの内容

質的分析により、205の家族ケアの場面と7のコアカテゴリー【】、39のカテゴリー【】が抽出された。

- (1) **看取り時期の家族ケアの内容**：「危篤前」の時期は、【患者の死をタイミングよく知らせる】や【家族と患者とのいい思い出の共有】などの家族ケアを実践していた。「危篤」時期は、【差し迫った患者の死の再告知と看取りにおける家族の意思決定の支援】などを行いながら、【悔いを残さない看取りにむけての家族ケア】を行い、「臨終」時期は、【不安なく看取りができるための家族ケア】を実践していた。
- (2) **死別時期の家族ケアの内容**：「命終」時期は、呼吸停止後【患者が亡くなったという事実の受け止めと心の整理をするための時間確保】の家族ケアなど【患者の死を受け入れるための家族ケア】を行っていた。死亡宣告時は、キーパーソン以外の【家族に罪悪感を抱かせないための家族ケア】や死亡宣告後は再度【家族だけの十分な別れの時間をとりもつ家族ケア】を実践していた。【死後のケア】時期は、家族と看護師が協働でケアを行い、家族が最期に何か一つでも患者のことを行えるように配慮し【家族と看護師の協働による旅立ちのセレモニーの創成における家族ケア】を実践していた。
- (3) **看取り時期から死別時期に至るまでの継続した家族ケア**：看取り時期に家族が抱いた患者とのいい思い出を死別時期において再度、家族に想起させるように関わり、また患者の死に対して意味づけできるような家族ケアを実践していた。最後のお別れ会では、家族自身による患者の死に対する肯定的な意味づけが行われていた。

4. 結論

緩和ケア病棟における死別ケアにみる終末期がん患者の家族ケアの構造として、看取り時期と死別時期の家族ケアの特徴が明らかになり、その2つの時期は継続した一連の家族ケアとなっていた。

- 1) 看取り時期は、家族の意思決定の支援を行い、後悔しない看取りにむけての家族ケアを特徴としていた。
- 2) 死別時期は、患者の死をもって家族ケアが終了するのではなく、看取り時期に行った家族の行為に対しての意味づけや患者と家族とのいい思い出を想起させることなど、患者死亡後は家族ケアに比重をおいた看護実践が行われていた。
- 3) 看取り時期から死別時期に至るまでの継続した家族ケアは、患者の死に対する家族の肯定的な語りから、家族のグリーンワークの助けとなることが確認できた。さらに、それが家族にとって患者の死に対する意味の再構築へと繋がることが推測された。

本研究の結果は、緩和ケア病棟における看護師の家族ケアの構造を明確にしたが、今後、緩和ケア以外の施設でもその結果を検証しつつ、看護実践に活かせるような教育開発が必

要である。

論文審査結果の要旨

本邦における死因の第一位は、がん疾患によるものであり、全体の死亡率の約3割を占めている。さらに、死亡場所として約9割の患者は施設における死亡であり、終末期における患者・家族に対する質の高い看護援助の提供は重要な課題の一つである。そのような中でこれまで、看取りや死後の処置に関する看護援助のあり方について、いくつかの研究はなされてきている。しかし、患者死亡後、つまり看取り以降後の死別期の家族ケアについては、死後の処置といった機能的な処置のケアに留まるのみで、緩和ケアの理念で提示されている家族ケアとしてのグリーンワークに焦点をあてた看護援助については、国内外を含めほとんど明らかにされてきていない。

申請者は、これまでの一般病棟における長い看護師経験から終末期における家族ケアのあり方にいくつかの疑問や課題を抱えてきた。そして、その課題を追求すべく博士前期課程において、緩和ケア病棟での終末期患者に対する看護師の死の認識についての研究課題に取り組んできた。博士後期課程では、修士での研究をさらに発展させて、終末期患者の家族に対する質の高い看護援助の提供に資するために、本研究テーマに取り組んだ。

本研究の特徴として、申請者は、緩和ケア病棟において、終末期がん患者とその家族のケアに直接携わりながら、約7ヶ月間という長期間にわたるフィールドワークの基に、看取りから死後のケアに至る一連の看護ケアの詳細を参与観察したことである。そしてその参与観察や看護師からの面接によって得られた長期間にわたる膨大で詳細な質的データを逐語録としておこし、質的帰納的分析によって本研究結果を導き出してきた。死にゆく患者とその家族に寄り添いながら、患者の死亡退院までの参与観察データを収集・分析していくプロセスは、決して容易いものではなく、悲しみの中に身を置くという申請者自身のたゆまない努力と忍耐とケアリング精神、さらに研究協力者との信頼関係の構築の上に成り立つ研究プロセスであった。そして、長期間、死と対峙していかなければならない終末期がん患者と家族のつらい時期に寄り添える申請者自身の人間性、かつ看護師としての高い資質があったゆえんで可能になった研究だと考えている。

本研究によって明らかにされた死別期の家族ケアは、緩和ケア病棟で行われている家族ケアの一つではあるが、緩和ケアの基本的理念としての家族ケアのあり方が内包されており、一般病棟や在宅ケアの場でも活用できる要素を含んでいると考えられる。よって、今後他の施設でも検証を重ねながら、死別後の家族ケアの構造について明確にしていくことが必要である。

審査の結果、主に以下の点について追加修正をすることが求められた。

1. 看護師に対する面接の分析から導き出された「看護師の認識」についての結果や考察が明示されているが、一貫性がない章立てであり、看護師の家族の死別ケアに繋が

るように修正をする。さらに、看護師の認識に関するインタビューガイドの内容を資料として添付する。

2. 死後のケア時期の家族ケアについては、カテゴリー名のいくつかがこれまで行われてきた通常のケア内容の印象を受ける。これに関しては、申請者の意図していることが伝わるように、ネーミングの修正を行う。
3. 用語の操作的定義として「家族」「死別ケア」に関して本研究の趣旨に添うように内容を修正する。
4. 2箇所（緩和ケア病棟からデータ収集を行っている）ので、データ収集の順序性や、2箇所からデータ収集を行う必要性について、方法で明記する。
5. 家族ケアと遺族ケアの言葉を統一して使用する。
6. カテゴリー名が体言止めになっているものとそうでないものが混在しているので語尾を統一する。
7. 他職種も対象にしているが、結果には看護師に関することしか明記されていないので、他職種を対象にした根拠を明確にする。
8. 死後の別れの時間を1時間としているが、この時間提示そのものを教育現場に導入するためには根拠付けが小さい。これに関しては、「時間」そのものに意味があるのではないので、誤解を生じない表現に修正を行う。
9. 「緩和ケア」のキーワードをタイトルに入れてあるので、それを方法や考察へも反映させる。
10. 「最後のメッセージ」という「最後」の言葉が、本当に最後かどうかの根拠が明確でないため、そのネーミングの根拠について述べる。

以上の指摘に関して、研究指導教員ならびに副査の委員の指導のもとで加筆修正することを条件に、博士論文に値するものとした。審査会終了後、速やかに修正版の論文の提出がなされ、上記指摘に関する論文の追加・修正がなされた。